
傭兵先生

五月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵先生

【Zコード】

Z4566Z

【作者名】

五月

【あらすじ】

現役傭兵の隣依ないはお風呂を借りる代わりに、陽耀國の国立魔法学校 通称ようがく で働くことになりました。「は?聞いてないぞ」「だつて隣依君、お風呂入ったよな」主人公最強系です。苦手な方は戻るをクリック 不定期更新 用語集を勝手ながら削除させていただきました

「つだあ！めんどくせえ！後何匹残つてんだー？」

「玲愛れおさん頑張つて下さー！今見えてるので最後ですー！」

「見えてるのつて・・・何匹いんだよこれえー・そろそろ心折れるぞー！」

「つむせこぞ玲愛れおー弱音吐いてる暇があつたら田の前の魔物ぶつた切つてろー！」

「だああああああー！わあつたよ、儺依なにー！由良ゆりー頼むー！」

「はー！【その脚は風よりも早くその眼は千里を見通すその腕は力強くその身体は鋼鉄のように硬い】ー！」

「よつしゃー！ありがとよ、由良ゆりーけよつへら行つてへりあーー！」

「気を付けてー！」

目の前に広がる魔物達の群れは大きく、まるで一つの生き物のよう^リに蠢^{うご}いている。

ハツキリ言つて気持ち悪い。

この集団に突つ込んでいつた玲愛れおに关心しながら、田の前に飛び出て来た魔物を狩る。そろそろ魔物の血や体液で使い物にならなくなってきた刀を強く握ると一步前に踏み込み、薙ぎ払う。その剣圧によつて魔物が一度に5・6匹吹き飛んだ。

「儺依なにさんー！」

「ん？どうした？由良ゆりー！」

「あ、あの、玲愛さんにはああ言いましたけど……本当に大丈夫なんでしょうか？」

「お前がそれを言つちゃあ、おしまいだろ」

「……そう、ですね……【絶対大丈夫】ですよね……」

「ああ。せつひとつつみたい大丈夫だ！俺達に任せとけ」

「はいっ」

由良は言靈操る一族の生まれで、肩の少し下まで伸びた青い髪と、優しげな青い瞳がその証だった。

そして今、その少女から【絶対大丈夫】といつも言靈が発せられた。だったら・・・・・・俺達は絶対大丈夫だ。

「儺依さん【絶対に大丈夫 絶対に皆無事でこの騒動は解決します】！」

青い瞳に強い決意の輝きを見て、俺はにっこり笑った。

「よく言つたー！」

由良の言靈によつて身体が軽くなつたことを感じながら、玲愛の後に続くように魔物の群れに飛び込んでいった。

* * * * *

「ははは・・お互いぼろぼろだなあ、 儺依君」

「ああ。・・・それにしても、一国の王が酷い有様だな」

儺依と話しているのは、この討伐部隊の支援者であり、実際に戦場に出て魔法を振るうといつお転婆（？）振りを發揮する、人間族の代表であり陽耀国^{ようちょうこく}の王である陽佳^{はるか}だ。

いつも身に着けている煌びやかな服を脱ぎ去り、そろらの傭兵が着ているようなボロを身に纏っている。といつても、その服の頑丈さは非常に高く、三下が振るうような剣では傷一つ付けることはできないだろう。

「いーの、いーの。たまには発散しないと
「発散つてレベルじゃないけどな」

全身に傷を負いながら、それでも2人の表情は明るい。

「それにしても、儺依君さあ

「あ？」

「その髪、邪魔じゃない？」

「ん～あ～まあ、こ～ういう時はちよつと邪魔だとは思うナビ

「伸ばしてゐ事に何か意味でもあるのかい？」

儺依の髪は長い。いつも首元で一つに結んでいるが、その長さは腰にまで及んでいる。儺依が首を傾げるのに命わせて、黒い髪が揺れた。

「いや、あるつちやあるが、ないつちやない・・・・・・・・・・・・」
これが終わつたら思い切つて切つて切つてみるか

「おーおー、そうしろ、そうしろ！切つたら一度顔見せに来なよ

「気が向いたらな

「くくく・・俺の頼みをこんなにあつたり流すのは、君へらいだよ
「そりゃどーも」

こんな呑気な会話をしているが、未だに魔物の勢いは衰えておらず、他の仲間たちは応戦中である。

では、何故この2人が戦場から少し離れた場所でのんびりしているかといふと、

- 1・儺依の刀が使い物にならなくなつてしまつたため
- 2・後ろから全体の様子を確認するため
- 4・皆が区切りをつけて戻つてくるのを待つため
- 3・魔物達に、とつておきの魔法をぶつけてやるために

ぞくぞくと戻つてくる仲間たちを迎えるながら、儺依と陽佳は魔力を溜めていく。

最後の最後に玲愛れおが戻ると、2人は5歩ほど前に進み出る。

「さあ、これで終わりだ」

「風呂入りたい」

「唐突だなあ。これが終わつたらいくらでも入れるだろ? うへんななら俺のを貸してあげようか?」

「よしー言ひたな。約束守れよ。お前のアコのヒト敵だけあって広い
もんなあ」

「良いよ。その代わり儺依君も俺の言つ事一つ聞いてくれよ」

「ひめめこひしづくめい」
（ひめめこひしづくめい）

「おう。俺を早く風呂に連れてつてくれ」

「赤き灼熱の使徒よ 集え集え 閻を貫く槍となれ
世界を巡る者よ廻れ廻れ 赤に添いてその導き手となれ
母なる息吹よ 逆れ逆れ 生命の争奪者となれ
満ちたる者よ 包め包め 全てを覆い一つとなせ！」

魔物の群れ、儻依、陽佳、他の討伐部隊達そして山や空が白く白く染まり

この日、陽耀国から山が一つ消えた。

「陽耀国魔術学園の教師？」

俺は濡れた髪を布で拭いながら、はるか陽佳が言つた言葉を反芻した。

「は？ 聞いてないぞ
『だつて僕依くん、お風呂入ったよな』」

同じく濡れた髪を拭つている陽佳はるかが一〇一〇笑いながらそんなことを言つ。

その笑顔に黒いものを感じながら、俺はガシガシと頭を掻いた。

「…………期間は？」

はるか陽佳が条件を受け入れてもらえたのだと顔を輝かせた。

「最低1年」「ふざけんな」

俺は眉間に皺を寄せながら陽佳の言葉を切り捨てる。

現役の傭兵にとって、1年も仕事を制限されるのは死活問題だ。今回騒動でかなりの収入が入つたが、だからといって遊び呆けていたら半年ほどで金が底をついてしまう。俺が所属している傭兵团には1人、笑つてしまふほどよく食べる男がいるのだ。
だいたい、身体がなまる。

「給料はちやんと払うから」

「…………いくらだ？」

「これくらい」

ちらりと陽佳の指を見る。

「一年で？」

「いや。一ヶ月で」

陽佳が提示した額は不定期収入の傭兵業より、はつきりって良い。だが、そこまでの金を払ってまで、なんでわざわざ俺なんかを雇おうとするんだ？・・・・・怪しい。

「けつこうな金額だが・・・何考えてんだ？」

「うん。儻依君には教師の仕事と一緒に傭兵としての仕事も頼もうと思つててね」

「傭兵としての仕事？」

「そいつさ。今回の件でほとんどの闇魔獣を潰せたけど、逃がしたのが何匹かいただろ？」「なるほどなあ」

「みづみは、学園に侵入する魔物を始末してほしいのだろ？」

昨日、闇魔獣を討伐した緑壁山（昨日抜れて無くなつた）は、ようがくから馬車で1・2時間の場所にある。逃げ出した闇魔獣が忍び込む可能性は十分にありえる。

それに相乗効果として、ほかの関係のなかつた魔物達も暴れだすだら。

「まあ、理由は分かつたとして。俺が教師なんて出来ると思つてる

のか？」

「なに言つてゐるんだ。儻依君の知識量物凄いじゃないか。あの知識自慢の宰相が悔しそうな顔してたぞ」

「いや、教えるうんぬんはまだ良いんだよ。経験も多少ならあるし「?じゃあ何が問題なんだ」

「お前・・・ようがくの生徒つつたら大半がぼんぼんだろうが。誰がまともに傭兵なんかの授業受けるかよ」

そうなのだ。ようがくは陽耀国魔術学園といつ名前の通り、魔力を持つた者しか入学できない。

この世界には大きく分けて人間族にんげんぞく、魔人族まじんぞく、獸人族じゅうじんぞく、精靈族せいれいぞく、言の葉族ことばぞく、清良族きよらわぞく、綺羅族きらぞくという7種類の種族に別れている。

ようがくに通つている者はその中の人間族と精靈族が大半を占め、しかも、そのほとんどが国の要職に就いている者の血縁者なのだ。魔力も高いが気位も高い。子どもだといふことで手も出しにくいし。はつきり言つて、なるべくなら関わり合いになりたくない。

「それなら大丈夫！儻依君には特別学級を受け持つてもらつから」「は？特別学級？聞いたことないぞ、そんなクラス。それに嫌な予感しかしねえ」

「特別学級っていうのは、個人レッスンを主体とするクラスなんだ」「ちょっとまで。それ、クラスにする意味あるのか？」

「あるある。授業に極端についていけなかつたり、ある1つの特技しか持つてなかつたり、そもそも授業受ける気がなかつたり、ミニユニケーションが上手く取れなかつたりする子を集めて、それぞれに合わせた授業をしていくんだよ」

「おい、こひ。最初の2つはともかく、後のはただの厄介払いじゃねえか」

「そもそもね。・・・でも儻依君、こういうの好きだりうつ？」

「・・・・まあ、否定はしない」

陽佳^{はるか}の言つとおり。俺は少しづつ“特別学級”に興味を持ち始めていた。

俺も一族の落ちこぼれ、異端者と呼ばれている。そのクラスの子ども達に勝手に親近感を持ち始めたのだ。

それが分かっているのか、陽佳^{はるか}が笑顔で話を続ける。

「教師やってる間は好きなだけこのお風呂入らせてあげるから
「やる」

最後は風呂に釣られた俺だった。

* * * * *

1か月後

「では、今から私達の質問に答えて頂きます」

「・・・・・」

国王が依頼したこととはいえ、そう簡単に教師として受け入れられるはずがなかつたのだ。

俺はようがくの教師もほんほんばかりだといつことを、すっかり忘れていた。

「「この國の創造神は？」

「主神・陽螺世帷^{ヒラコイ}」

教師もそれなりの権力を持つてるので、国王も「こいつ等の言葉を無碍^{むとく}には出来ない。

俺がようがくの教師になると聞いたときの「こいつ等の反発は凄かつた。

『傭兵などが、この神聖な学び舎を汚すこと』とは許されない。だの『力しかもたない愚か者に教師など勤まらない』だの『我らに対する侮辱だ』だの

ぴーぴーと騒ぐ事、騒^{ハハキ}ぐ事。耳障りでしょうがない。

「擦り傷に効く高志岐地方特産の薬草の名は？」

「楚紫野草^{そじのそう}」

陽佳も難しい顔をして黙ってしまった後、予想外の人物から鶴の一
声が上がった。

『では、彼が陽耀国魔術学園の教師となりえるかを調べてみましょ
う。わたくし達教師陣からそれぞれ100問ずつ質問をしていきま
す。一つも間違えることなく答える事が出来たら教師として迎えま
しょう』

そう言ったのはようがくの学園長の朝日あさひだった。

黒髪黒眼で整つた顔を持つ、いわゆる美女に分類される彼女は、元
魔術師長のエリートだ。

そういう訳で、今こうして質問攻めにされている。

この会議室にいる教師の数は総勢18名。つまり俺は1800問も
の質問を受けることになっているのだった。

正直言つて、そこまで頑張つて教師になりたくない。
そもそも風呂田当てで受けた訳だし、そこまで深いこだわりもない
のだ。

「狭間の乱が起きた年は?」

「314年」

「精霊への対価は?」

「魔力、血、生氣」

「魔獸を寄せ付けない方法は?」

「結界を張る。亞莉弥草あじやそうを焚たく」

だるい。物凄くやめたいが、陽佳はるかの顔が怖くてやめられない。

普段ならどんな態度でもとれるが、あの顔の時はダメだ。

いつもはたいていのことを許してくれるが（だから俺も気安く接せられる）、自分の企みを邪魔しようとする者には容赦がない。

「陽耀國の歴代の国王の名前は？」
「陽耀、陽彗、陽守、陽灯、陽雲、陽子、陽高、陽佳」

あの顔から察するに、どうやっても俺に先生になつてもらいたいようだ。

改めて、何故俺がようがくの教師になることを望んでいるのか気になつた。魔物の話に納得はしたが……なんだか、それだけではないような気がする。

ああ・・・・なんか、どうちに転んでもめんじくをそうだな。

俺の眼差しの先で、陽佳が一やつと一瞬笑った顔が見えた。

嫌な予感がして周囲を見渡すと、ようがくの教師達が苦虫を數十匹噛み潰したような顔をしているのが分かる。

これはまさか・・・・・・・・

「1800問中1800問正解ですか」

まさか本当に答えてしまうとは。

ようがくの学園長がそう呟いたのが聞こえた。

えへビツヤヒ、採用試験には受かつてしまつたようだ。

01・傭兵先生誕生（後書き）

おまけ

「あ、そつそつ隣依君」

「あ？」

「髪の毛切ったんだね。似合つてるよ」

「…………」

やつこひとは会つた時、一番最初に言へよ。

02・傭兵先生と特別教室（前書き）

9 / 23 文を追加しました

「これで校舎の施設説明は以上です。何か質問はありますか?」

「肝心の特別教室はどうにあるんだ?」

一週間前、無事(?)に採用試験に合格した俺は、ようがくに来ていた。

「この一週間は俺が教師として働く準備の為の期間だったらしい。 さうとも知らない俺は特に何をするでもなく日々を過ごし、 今日、いつものように動きやすい傭兵服を着て学園を訪ねたら滅茶苦茶怒鳴られた。

こここの教師は基本、礼服を着て授業を行つていふので、一歩間違えればただの「ロシキ」のような傭兵服など以外だそうだ。

「今更そんなことを言われたつて貴族じゃないんだから礼服なんぞ持つてない」

そう言つたら、学園長が礼服を貸してやると言つ。

女性である朝日学園長のものは俺がいかに男としては細身だとしても無理があつたので、

教頭のものを借りた。物凄く嫌そうな顔をされた。心外だ。

この教頭は元精靈騎士団副団長で、名を炎藍(えんらん)といつ。60を超えた

今でも背筋は真っ直ぐに伸び、キビキビとした動きをする精霊族の爺さんだ。火属性のようで、赤い髪に金の眼をしている。金の眼といつても、随分眼が細いので微かにそつと分かる程度だ。

とまあ、そんな訳で教頭の礼服を着た俺は朝日学園長あさひに校内を案内してもらっている。

「特別教室は別棟にあります」

「別棟？ほかにも校舎があるのか？」

どでかい校舎を3つも回った後だったので、まさかまだ校舎が残つているとは思わなかつた。

「では、案内します。ついてきて下さい」

「・・・・・」

* * * * *

特別教室は3つ並んだ校舎の一番後ろにひつそりと佇んでいた。
他の校舎は首が痛くなるほど見上げなければならなかつたのに対して、この校舎は首を曲げなくても全体を眺められるくらいだ。つまり・・・・・・小さい。物凄く。

「ちっ　ちえー」

「ここが特別教室です」

「随分こじんまりしてるなあ」

「1クラスだけですからね」

「ああ、そういうやうか。・・・・ある意味豪華なのか？まるまる

校舎1つが教室だつてのは

「中に入りましょー」

「おう」

無表情に近い顔をしながら先を進む学園長の後を追いながら、これからどうなることかと、一つ大きな溜息を吐いた

* * * * *

学園長の後ろを歩きながら廊下を進む。薄暗く感じるのは先入観による想い込みだろうか？

キヨロキヨロと初めて都会に出た田舎者のように周囲を眺めていると、妙に校舎が綺麗な事に気が付いた。

「なあ」

「なんですか？」

まったく温かみの感じない学園長の返事を気にすることなく、疑問に思ったことを尋ねる。

「この校舎、いつ頃に建てたんだ？」

学園長は記憶を辿るよひに眼を泳がせると、口を開いた。

「・・・3年ほど前ですね」

「・・・特別学級始めたのも、それぐらいか?」

「そうですね」

「ふーん」

結構最近からなんだなあ・・・。

陽佳の奴、なんでこんなクラス作つたんだ?

「儺依先生」

ようがくが開校してから約300年。どうして今更そんな・・・?

「儺依先生! ! !」

「え? あ、はいはい」

学園長が眉を吊り上げている。全然気付かなかつた・・・。
まだ先生と呼ばれることに慣れていないせいか、『儺依先生 僕』
の公式が頭の中で出来上がつてゐるみたいだ。

「もうすこし教師としての自覚を持つて下せこ」

「あ~」

“あ~”じゃありません! まずは言葉づかいです。そんなことじ
や陽耀学園の教師としてはやつていけませんよ

「まあ、だらうな

“でしうね”! ・・・まったく。あなたが軽く見られると
いつことば、国王陛下の威厳に傷つけるようなものなんですよ
「陽佳の威厳ねえ・・・」

其処らへんの事はまったく心配しないんだけどなあ。
あいつが俺に猫かぶれつて言わなかつたってことは、自由にやつて

くれて構わないって事だろ？」。

まあ、それをこの学園長に言つても怒られるだけだろ？ナビ。

「国王陛下を呼び捨てる事もやめてください。ナビも達が真似した
らどうするんですか？」

「ああ、はいはい。気をつけますよ」「

「とても疑わしいですけど・・・まあ、良じてしまひ」

その後、説教の様な事を言いながら、妙に世話を焼いてくる学園
長を受け流しながら廊下を進んだ。

(「どうか、特別教室遠くないか？」「そんなに近くないよな？」)

* * * * *

「い」です
「やつとか

目の前の教室のプレートには『特別教室』の文字。
嫌な事をしている時は時間が経つのが遅く感じるとまことばじ、う
ん。す』い精神的に疲れたな。

「ん？」

教室の扉が少し開いている。よくよく眼を凝らしてみると、とても
細い糸が見えた。

「初歩的な悪戯だよなあ・・・
「何か言いましたか？」
「いや。・・・俺が先に入つてもいいか？」
「別に構いませんけど・・・？」

不思議そつな顔をしている学園長を避けて、ドアの前に立つ。

「ちよつと離れてろよ

「え？」

ドアの窪みに手をかけ、一気に横に引く。

バツツシャアアアアンン！――

「キヤー。」

意外と可愛らしい学園長の悲鳴を聞きながら、最後に落ちてきたバケツを受け止める。

「へえ。このバケツによくこれだけの水を詰め込んだな」

片手の手のひらに載りきるくらいの小さなバケツを覗きこむ。底にみつしりと質量魔術が組み込まれていた。

「なんだ。おちこぼれクラスつってたけど、なかなかレベル高いじゃないか」

この『特別教室』にはレアな中級魔術を使う生徒がいるようだ。どうしようもない生徒を集めたという『特別教室』にだ！

面白い

自分の口角が持ち上がるのが分かる。これからのこと楽しみになつてきた。

未知のモノに対して好奇心が湧き上るのは傭兵の性だ。

「な、ななな儺依先生！」

「ん？」

「び、びしょ濡れじゃありませんか！－」

「ああ、うん」

確かに、バケツの水を浴びた俺は濡れ鼠のようになつている。あま

り氣にしていなかつたのだが・・・。
あ。 そいつればこれ教頭のだ。

「教頭に怒られちまつ」

怒られるのはあまり好きではない。

「そ、そんなことより！誰ですか！？」こんな悪戯をしたのは！――」

今更ながら自分の状態を確認しだした俺を追い越して、学園長が教室を覗きこむ。

「はははー。 そいつホントに傭兵なのかよ？ これくらい避けろよ

な！」

「炯汰君！」

声の方に目を向けると、茶色い髪を一つに結んだ少年が翠の眼を輝かせながらニヤリと笑っていた。

(なるほど。仕掛けたのはこのガキか。なら、この魔術も？)

しげしげとその少年を眺めていると、学園長がひきつを振り向いた。

「儺依先生！」

「はいはい」

長い前髪の水を絞りながら適当に答える。水が生ぬるくなつて気持ち悪くなってきた。
そろそろ払うか。

「儺依先生は先程わたくしに離れていろと言いましたよねー。」

「そんな大きな声を出さなくても聞こえるつて」

「言いましたよねー！」

「言つたよ」

黒い髪を少し乱し、黒いつぶらな瞳を吊り上げる学園長。さつきまでの無機質な態度とは大違ひだ。

何をそんなに熱くなつているのか分からぬが、声を荒げてゐる学園長を見るのは結構楽しい。

「「」の悪戯に分かつて引つかつたんですよねー！？」

「悪戯つてのは引つかつてなんぼだよな」

答えになつていない返事を返しながら左腕を手のひらを上にして横に伸ばす。

「ハツキリ答えて下さい！」

「言い訳するなんて、かつこ悪いのー傭兵つてそんなもんなのかよ」

2人が「ちやーちやー」と言つてゐるのを無視して口を開く。

もう「」の湿氣には耐えられない。

「「集え」」

一言呟くと身体を濡らしていた水が左手の上に集まつていいくのが感じられた。髪が、服が、肌が、乾いていく。

それに比例して大きくなる水の塊。最終的に人の頭3つ分くらいの大きさになつた。

「「」なんに詰め込んでたのか・・・」

多いとは思つていたけど、これ程とはね。

この魔術を施した相手にさらに興味が沸いた。このガキに聞けばわかるだろ?つか?

「「散れ」」

左手の上に浮かんでいた水がザアッと蒸氣に溶け込んでいく。

「おい。そこの炯汰けいたとかいつたか?」

「一。」

化け物を見たような顔をしているガキに向けて言葉をかける。いつのまにか学園長は黙つて俺の顔を見つめていた。

「「」のバケツの魔方陣描いたのは・・・誰だ?」

俺の顔を見たとたん、炯汰けいたはビクツと一步下がった。

今の俺はそれなりに悪い顔をしてくるよつだ。

02・傭兵先生と特別教室（後書き）

おまけ

儻依「うわっ、これめっちゃ首元暑い…」

教頭「これが礼服という物だ。我慢しな。まったく。これくらいの暑さに耐えられないとは…やはり傭兵とこいつ者ほつんたらかんたら」

儻依「うーん…・・・・・襟立てるか。お~うよとマジになつたかも」

学園長「・・・・・もひ、好きにしてください。・・・・・・・・・・・・

・・・・・まあ、行きますよー！」

礼服＝スーツもどき

03・傭兵先生と特別教室の生徒達（前書き）

ちよつとシリーズ？

03・傭兵先生と特別教室の生徒達

左手にバケツを持つと、一歩進む。
それに合わせて一歩引く炯太。

これからしばらく教師と教え子の関係になるのに、こんなに怯えさせて良いのだろうか?と頭の片隅で思いながらも、また一歩進む。今度は一歩引かれた。

「めんどくさいな・・・」
「は?」

咳くと同時に数歩踏み込んで、間抜け面をさらしている炯太を捕まえると脇に抱えた。
手つ取り早い方法をとる。とつとつこつしていれば良かつた。

「え? は? !」

突然のことに対し眼が回つたらしく、炯太は翠の眼を揺らしている。
予想外に大人しい反応に気を良くしながら、これから俺が教鞭きょうべんを振るう教室を眺めた。

うん。人っ子一人いねえ。なんだ、初回から生徒による新人いじりか?
うーん。これだと、まだ教室にいただけ炯太はマシなほうってことになるのかねえ?

「誰もいないが」

「えー？」

学園長が慌てて中に入つてくる。最初の落ち着いた印象からじんづれしていく学園長は、驚いたように田を見開きながら教室をぐるりと見渡した。

「な、なんで誰もいないの？ちゃんと知らせておいたのに…」

「俺が聞きたい」

「…・・そうですね。すみません、取り乱しました」

学園長は少し乱れた黒髪を撫でつけて整えると、ふうと大きく息を吐いた。

そして、せよとんとしている炯汰を睨みながら口を開く。

「まつたく、こんな悪戯をして…嘘はどうじこるの…？」

「い、言つわけないだろ！」

「またそんなこと…」

「ひるさい…つていうか、アンタも早く放せよ…。」

バタバタ暴れ始めた炯汰を落とさないように抱え直し、気配を探る。学園長が声を上げた時、小さな空気の揺れを感じたのだ。比較的綺麗な壁、絵本が多く入っている本棚、運動着のはみ出るロッカー、薄汚れた床、落書きの描かれた柱、チョークの粉の残る白っぽい黒板・・・・・・・お。あれは？

「なあ、学園長。あの扉なんだ」

「は～な～せ～よ～！人の話聞けってば…。」

「ああ。あれは仮眠室です。先生によつてはあそこで寝泊まりしてらっしゃる方もいますね」

「おこー！聞こえてんだろ！？」

「へえ～広いのか？」

「なあ～！おい～！こりつ～！」

「それなりの広さはありますよ。ベット、ソファー、小さいですがキッチンもありますし、シャワールームにクローゼットも付いています」

「降ろせよ～降ろしてクダサイ～～～～！」

「へえ。そこいらの宿屋より設備が良いな」

「・・・・・」

「あの部屋がどうかしたんですか？」

最終的に諦めて大人しくなった炯汰^{けいた}を抱えながら、その仮眠室に近づく。俺が何をしようとしているのか気が付いたらしい炯汰^{けいた}は、少し身体を固くした。うん。あの部屋で間違いないらしい。

「儺依^{ない}先生？・・・え？もしかして、そこに居るんですか？」

学園長の言葉に応えることなく、一件の部屋の扉の前に立つた。突然静かになつた教室に不安を感じているのか、気配の揺れが大きくなつていて。耳を澄ますと囁くように会話しているのも分かつた。バケツをそこら辺に置き、ドアノブに手を伸ばす。すると右腕に抱えた炯汰^{けいた}が再び暴れ出した。

「別に、そんなに警戒しなくとも良いと思つんだけど」

「うるさい～放せよ～～！」

流石に妙な心境になつてくる。なんで志願した訳でもない教師をやらされているだけなのに、ここまで邪険に扱われなければならないのか・・・・・。

約束は守りたいと思うが、すぐ疲れそうだ。主に精神が。

「ああ・・・なんでこんな面倒くさい事・・・これならケヴィク50匹に囮まれてた方が数百倍楽だ」

全身漆黒の長い毛で覆われ、鋭い赤い眼をギラギラと輝かせ、その上、鋭い牙と爪を持つた人間の一倍はあるであろう巨体を思い浮かべながら眉間に皺を寄る。

暴れ続いている炯汰^{けいた}の頭を軽く叩くと、ドアを開けた。

* * * * *

仮眠室に隠れていたのは男子が3人、女子が2人の計5人だった。

・・・・・・・・少くないか？いや、少ないよな確實に。
炯汰入れても6人しかいないぞ。特別教室だからこんなもんなのか？
教卓に立つ学園長の隣に置いた椅子に腰掛けながら、自分の机に座
らせられた生徒達を見る。いくつか空いた席があるから、これで全員
じゃないのかもしね。

呑気にクラスの様子を眺めていた俺とは異なり、眞面目な学園長は
少し険しい顔をしながら生徒達の顔を見つめている。

「どうしてこんな事をしたの？ちゃんと説明してちょうだい」
「…………」
「まさか、これまで務めていてくださった先生方も同じ様な事を
していないでしょ？」
「…………」

まったく反応を返さない生徒達に学園長の顔がさらに険しくなる。
続けていくつか質問をするも、やはり答えは返ってこない。学園長
の顔がまた険しくなる。堂々巡りだ。

美人はなにをしても美人だと言っていたバカがいたが、今の学園長
には近づきたくない。隣にいるのが嫌になってきた。

その後も同じような質問を繰り返していたが、生徒達はいたつて無
反応だ。

俺は特に興味も無かつたので、この辺りで止めてもうつ事にしよう。
眠くなつてきた。

「黙っていても何も伝わりませんよ！誰でも良いから、な「学園長、
もつそのくらいに」とこうぜ」「…………邪魔しないでください」

俺が口を挟んできたことに驚いたようだが、一瞬で元に戻った。

眉間の皺が深い。

「・・・そんなに皺寄せたら取れなくなるぞ」

「...」

学園長は、わざと両手で眉間に隠した。みるみるうちに頬が赤く染まる。

「あ、あなた、女性に対して失礼ですよ...なにして」と囁つたです
か!」「

「事実だろ」

「...」

飛んできた拳を避けると、その腕を取り、引き寄せた肩に抱いた。

「あやあ...！」

「...・意外と軽いな」

「え? いつもですか？」

心なしか嬉しそうに答える学園長に適当に答えながら廊下に出る。トンツと学園長を降ろすと「じゃ」と囁いて扉を閉めた。ついでに「固定せよ」と簡単な施錠をする。

「ちょっと! 何してんですか! ?」と囁つ声が聞こえた
ような気がしたが、気のせいだろう。ドンドンと扉を叩くような音
もするがこれも気のせいだ。うん。

「はあ~ダルい」

え~今日は顔合わせした後、授業つづてたな。鐘がなつたら1限目の始まりか。

…………一日が終わるまで、まだまだ時間がある。あります。

ああ、でも授業つて書くよりも質問があつたらそれに答えるつて形式みたいだし。

…………それでもめんどくさいな。さつきの魔方陣描いた奴の正体もどうでもよくなつてきたし。

「はあ」

大きく息を吐くと、背後でビクつとした反応があつた。なんだか怯えられたみたいだ。
だらだらと教卓に戻ると、椅子を引き寄せ座る。
まずは自己紹介だよな。

「話は聞いてると思うが、俺が今日からお前達の担任になる儺依だ。
よひしひへ」

特に反応は返つてこなかつた。といつより、啞然とした空気が漂つている気がする。

「…………それだけ?」

燃え上がるような赤い髪をボーテールにした茶色い瞳の少女が、思わずとこつたように声を漏らした。

「ほかに言つ事あるか?名前だけ分かつてりや十分だ」「いやいや!どこの常識よ? !それ! !」「何か質問があるなら答えるけど」「え?う、うん」「ほらな。特に聞くよつの事ないだろ?」

「逆よ！逆！聞く事が多くて悩んでただけ！」

「しゅ、朱雲ちゃん！」

赤髪の少女・朱雲の隣に座っている黒髪黒眼の少女が、朱雲の服を引っ張りながら、焦つたように声を上げた。

「大丈夫よ、瑠維！」この人から、まつたくやる気感じないから…」

「まあ、否定はしないけど」

「ほら見なさい」

「朱雲ちゃん…」

ああいうのは見てて微笑ましいなど少しオヤジ臭い事を考える。やつぱり女がいると華があるよな。

この間の騒動では、男が数十人に對して女は由良をいれても2人しかいなかつた。しかも、その由良じゃない方の女というのが、女性という枠組みに入れておくのが申し訳なく思つぐらには男らしかつたもんだから、どうしようもない。

「なあ」

「ん？」

「あんた、特別教室がどんなもんか聞いてから来たのか？」

妙に真剣な顔をして聞いてくる炯汰を不審に思いながら、応える。

「はみ出し者の集まりだとは聞いたが・・・それくらいだな」

「はつ！そんな事だらうと思つた！あんた、ここを不良の集まりくらうにしか思つてないんだろ？」

「いや。あんな不良はいなだろ」

瑠維といふ少女を指差しながら言つ。指差された本人はといふと、

一度ビクつと震えると朱雲の傍に寄った。

「・・・確かに瑠維は・・・・・つて瑠維のことはいいんだよ！俺が言つてるのは「それに、お前清良族だろ？」・・・・・な、何言つて」

「目を見たら分かる」

「・・・・・・・・・」

「清良族に魔人族に獣人族に。よくこれだけ集めたよな。都心つて人間族と精霊族以外は殆どいないつてのに」

「・・・・・・・・・分かつてゐなら、なんで」

「は？別に・・・人間族以外がいるからつて何か問題があるのか？「・・・・・・・・・・・ううん。ない、よ、な。うん。そうだよ・・・」

「お前、大丈夫か？」

「ぼそぼそと何かを呟いている炯汰。何か拾い食いでもしたのか？」

「・・・・・・・・・・・うん。よし。俺は清良族の炯汰だ！よろしくな！」

「いや、知つてるけど」

「冷たい事言うなよ、センセー」

なんだか分からぬが、何かを認められたようだ。
満面の笑みを浮かべている。ちょっと引いた。

「あ！ちょっと、炯汰抜け駆けしないでよ！…はい！…はい！…私は朱雲。火系の精霊族でこのクラスのマドンナよ。よろしくね、先生！
！ほら！瑠維も」

「る、瑠維です。宜しくお願ひします・・・・・先生」

「ああ。よろしく」

マドンナの部分で炯汰けいたが物凄く微妙な顔をしていた事には突つ込まない方がいいのだろう。

「で、先生から見て右から、頭でつかちの匡凜」

「おい！」

黒髪に釣り目でメガネを掛けた少年が朱雲しゅなを睨むが、そんな様子を一切無視して朱雲は口を開く。

「人間族なのに魔術が使えない和巳君」

「・・・・・」

長い黒髪を一つに結んだ少年は、眼を閉じて腕を組んだまま微動だにしなかつた。

魔術が使えないのにようがくにいるのは、おかしくないか？其処ら辺どうなっているんだか。後で学園長にでも聞いてみるか。

「最後が鷲の獣人の飛淵君」

「・・・・・・・うん」

「何がうんなんだ？まあ、うん。

鷲わしの獣人だと言っていたが、垂れ目の金の瞳は柔らかい。焦げ茶の髪はあちこちに跳ねている。くせ毛なのだろうか？

「以上！現在のクラスメートでした！」

「現在の？」

「そう！このクラスつて生徒の入れ替わりが早いのよね。ちなみに一番長くいるのが私！分からぬ事は私に聞いてちょうだい！」

「ああ。そうさせてもらう」

「センセー、俺にも聞いていいからなー。」

「え?」

「え? センセー、その反応どうこつ意味? . . .」

「いじりうちゅうじー限目が始まる鐘の音^ねが鳴った。」

おまけ

朱「炳汰は清良族だからここに来たつて言つけど、私は頭が悪過ぎてここに入れられたと思うの」

炯「おい！失礼なこと言うなよ！」

朱「この前のテストでこの子オール一ヶタ取ったのよ」

「ちょー！お前やめろよー！」

僕一
ああ、うん。初めて会った時から、そんなんだろうなと思うて

た

朱「やっぱsettごのひで分かっちゃうのね」

儀一無自覺たゞハ五也黒鹿ホリト出シテだからな

朱一あはは！馬鹿オーラ！！

瑠「あ、走つて行つちやつた」

儻「からかい過ぎたか?」

朱「大丈夫。明日には忘れてるから」

瑠（可哀そな炳汰君……）

04・傭兵先生のはじめての授業

「オオオオオオン

「オオオオオオン

STの終了と授業の始まりを告げる鐘が響いた。

これから初授業となるわけだが、よく要領が分からない。まあ、おいおい慣れていけば良いか。期限は1年以上ある訳だし。・・・・・憂鬱だ。

特別教室。略して特教（俺考案）の生徒達はそれぞれ別の教本やノートを取り出して思い思いに勉強している。

朱雲しゅなと瑠維るいが教本を覗きこみながら話しているが、授業中の私語を

たしな 奪める気は無い。一つの事に関してそれぞれの意見を話し合いつのは
良い事だと思うし、俺もそうやって学んできた。

・・・・・・・・それにして、いいのか！」

仮にもこの世界で唯一の国立魔法学校だつてのに、これじゃあ殆ど
独学と変わりないんじゃないか？いいのか？

俺も学校に通つてたわけじゃないからハツキリしたことは言へない
が、ダメ、だよな。

しかも、特教は学年がバラバラだから授業なんてするだけ無駄だ。
ひとりひとり教えていけつて？キツイだろ。・・・俺もちょっと昔
の復習しどくか。

これからのことを考えると自然と眉間に皺が寄り、溜息が零れる。
陽佳はるかの野郎・・・面倒事押しつけやがつて。

「センセー！」
「ん？なんだ」
「ここ！わかんねえ。教えて」
「どれどれ・・・」

炳汰けいたが持つてきた教本を覗きこむ。

そこに書かれていたのは精霊魔法の基礎だった。

「お前、今何歳？」

「え？ 12歳だけど」

「ふうん。これ使えんの？」

「？うん。初級なら」

「ふんふん」

俺が覚えた時よりも6・7年遅いな。このペースが普通なのか。

「で、使えるのに何が分からんんだ？」

「これこれ！この精霊とコミュニケーション取る為の精霊語つてや

つ

突然の俺の質問を気にした様子もなく炯汰けいたが指差したのは精霊語の簡易表だった。

精霊語とは人間族が魔力を報酬に精霊の力を借りうける時に使う言葉の一つで、主に精霊に対する感謝や褒め言葉を表す。

精霊魔法の手順は

- ? 魔法の属性を決める言葉
- ? どういった現象を起こしたいのかという要望
- ? 魔力を放出
- ? 精霊が魔力を受け取り、力を行使
- ? 精霊語（言葉でも文章でも可）で感謝を述べるとなっていて、?以外は標準語で行える。

最後の精霊語での感謝は初級程度なら特に必要ないのだが、高度が上がるにつれてアフターケアとして重要になつてくる。

人間族側の考えは置いておくとして、精霊から見れば『人間く精霊』の方式が（精霊族以外は）当然であり、魔力を献上してくるから、その報酬として力を貸してやつているだけなのである。

よつて片手間ですむ初級魔法とは違い、それなりに力を入れなければならない上級にもなると魔力だけでは不満をもつ精霊が稀に現れる。

そこで彼らが使う精霊語によって感謝や尊敬を表し、精霊を持ちあげる事によつて満足させる。言わなくても魔法は使えるが、後々のことを考えると言わない方が損なのだ。精霊は人間の事を必要とはしていない。

精霊によつては、その言葉を聞くために張りきつて力を振るつてくれる者も稀にいる。
ちなみに、火精霊が多い。

「まあ確かに難解だとは思うけど　ありがとう　くらいは言えるだ
る」「？」

「え？ センセー、今なんて言ったの」

予想以上に爛^{けいた}汰の頭は悪いようだ。 ありがとう　くらい言えなくてどうする・・・・・基本の基本だぞ、おい。

「…………よし。お前ちょっとと其処に座れ」

教卓の真ん前の席を指すと羊皮紙とインクを用意し、そこに ありがとう と書く。

大人しく席に着いた炯汰けいたに文字が書かれた紙を見せながら問う。

「これ読めるか？」

「ありがとう」

「……………ん？」

即座に返してきた炯汰けいたの顔をまじまじと見つめる。

俺の視線に首を傾げる炯汰けいたにちょっととイラつとしてから、また別の言葉を書いて見せる。

助かりました
「助かりました」

素晴らしい
「素晴らしい」

美しい
「美しい」

輝く炎が月夜に映える
輝く炎が月夜に映える

……………。いいつ。読むぶんに関しては単語

力も文法も完璧なんじゃないか？
確か俺が持つてる本の中には精靈語で書かれた本があつた筈だ。持つ

てくれるか。

「お前、精靈語できるじゃないか」

「えー？ でも発音はわっぱりだし」

「それだけ読めりや十分だ。もしかして、精靈語書けるんじゃないのか？」

「書けるよ。俺、発音わっぱりだつたから・・・せめて読めて書けるようにひて練習したし」

「ちよつと俺が今から言ひ言葉書いてみる」

「うん」

さつきとは異なる単語と文章をいくつか言ひと、炯汰の羽ペンは躊躇なくサラサラと滑っていく。

「全部あつてるな」

12歳にして精靈語をここまで正確に書けるのはほとんぢあり得ない。それだけ炯汰が努力したつてことの証明だらつが、これは良い意味で予想外だ。

「炯汰。お前はこのまま精靈語を書く事を練習しろ」

「は？ でも、発音しないと魔法使えないじゃん」

「は？ 発音しなくても、書ければ使えるだろ」

「？」

「？」

なんだ、ここでは声に出さないといけないことになつてゐるのか？

発音したほうが効率は良いが、魔力を染み込ませたインクで紙に書いたものでも効果は変わらない筈だぞ？

どうも“ようがく”と俺の常識はずれているようだ。

「発音しなくても良いの?」

「良いだろ?」

「…………俺、聞いたことない」

「俺の先生が言つてたし、実践してたから間違いない」

「センセーのセンセー?」

「おつ、「

「センセーにセンセーつているんだ」

「やつやこむだり。本だけで学ぶには限度がある」

当たり前のことを聞いてくる炯汰。けいた俺をなんだと思ってるんだ?

「だつてセンセー傭兵なんでしょ?」

「…………ああ、やつこつ」とか

確かに傭兵は先生に付いて勉強したりしないもんな。

「ま、そういう変わり種もいるんだよ」

「ふ~ん」

頷きながら不思議そ^うにロツチを見てくる翠の眼に苦笑を返してから「他に質問ないなら戻れよ」と声をかけた。

「うふ。とにかく書く練習しどけば良いんだよね?」

「ああ。明日、見本見せてやるよ」

「え?ホントに!?.わかつた!..」

元気に自分の席に戻つていぐ背中を見送ると、窓の外を眺めた。
空は晴天。むかつくほど綺麗な青空だ。

もつぱり、頑張ってみようか

04・傭兵先生のはじめての授業（後書き）

儺依「炯汰は歳のわりに、言動が幼いよな」

炯汰「え？ そんなことないよ。こんなもんだって」

儺依「いや。俺はもうちょっと落ち着いてた」

炯汰「センサーの小さい頃って、どんなだったの？」

儺依「それはこれからのお楽しみだ」

炯汰「何それ。つまんねーの」

05・傭兵先生と小さな同居人

その後。

炯汰けいたと朱雲しゅながたまに質問しに来るくらいで、何事もなく一日田が終了。

警戒されてるみたいだから、しょうがないわな。

雰囲気的に過去のご教授方に對して色々と思うところがあるみたいだし。何やらかしたのか知らないが、俺に迷惑掛けるのはやめてほしいなあ・・・。

まあ、とにかく、仲良くお勉強つてのはまだまだ無理だろつ。生徒達の仲が良かつたってだけで善しとするか。子どもの喧嘩の仲介なんて真っ平御免だ！

* * * * *

俺が今いるのはようがくに最も近い位置にある商店街だ。日和会と
いう名の商会が取り仕切っているので、日和街とも呼ばれる。

新鮮な果物や野菜を見つければ購入。薬屋を覗いて香辛料を、パン
屋では2・3週間分の食パンを仕入れていく。日用品や台所用品も
買つて財布がかなり薄くなってしまった。

食材や雑貨で重くなつた袋を担ぎながら、最後に装飾店すずらんに
入つた。

ここで一つ問題が発生した。

(ああ、しまつた。ここ来てから買えればよかつた)

すずらんの入り口を通れずに引っかかった袋をしばらく見つめる。
なんだか凄く間抜けだ。

(そういえば、自分で買い出しに行くの久々だつたからなあ。ここ
んとうり買に出しが由良に任せたし)

仲間の少女の顔を思い浮かべながら思つ。

おつとりとした外見に反して、値引きに関しては歴戦の商売人達か
ら恐れられる程の技量をもつてゐる、俺達の傭兵団の優秀な財政担

由良の当者だ。

由良のおかげで、少し財布に余裕ができた。有難い存在である。

さすがに俺個人の依頼（？）の為の買い出しを由良に任せようつなんて事はしない。こんな事で一々由良の手を煩わせられないし、年上の男としてのプライドもある。

・・・・・久しづぶりに初心を思い出せて良いか。

玲愛に会って、由良が仲間になつてから、1人になることが無かつたから、なんだか新鮮だ。

そう考えると気分が良くなつてきた。

袋は相変わらず引っかかるが。

「・・・・・明日、出直してくるか」

無理に袋を引っ張ることはせずに、押し戻して店を出る。そもそも安い礼服がないか覗いてみよつと思つただけで、服は持つているのだ。

恥ずかしいから店員が寄つてく前に逃げよう。

「よつとー。」

袋を担ぎ直すと、真っ直ぐよつとーがくに戻つた。

* * * * *

「…………なんでお前いるの?」

「…………」

俺の目の前で困ったように微笑んでいるのか、どこからどう見ても
今日から俺の生徒になつた鷺の獣人の飛淵ひえんだった。

ここは特教に付属している教師用の仮眠室。

これから此處で寝泊まりしようと買い出しに行つてきたわけだが、
帰つてきたら何故か飛淵ひえんがソファーでくつろいでいたのだ。

「生徒つて学校が終わつたら、とつと家に帰るもんだと思つてた
けど」

「…………うん。ぼくね、住んでるの」

「…………?」

「そう。お家がちょっと、遠くて」

「ふーん?お前の家族、何処に住んでんだ?」

「朱雀様の山だよ」

「へえ、炎山か。確かに遠いな」

遙か昔。まだ神が地上に存在した頃に、その守護聖獣の一人 朱雀
が舞い降り、住処とした山として有名である。そこから、朱雀の
特徴に準^{なぞら}えて炎山と呼ばれている。

国家公認の聖地の一つだ。

ようがくから、その炎山には馬車で片道1~2週間かかるしまつ。

「で、ここに住んでるわけだ」「うん」

生徒たちから感じる今までの教師陣のイメージからして、この仮眠
室を愛用していたとは考えられない。

水道、ガス、電気がタダな上に、家具がある程度揃っている。もち
ろん家賃はない。

お金のない学生からしたら、これ以上ない程の最良物件だろう。

「飯とかはどうしてるんだ?」

「親がね、お金を送ってくれてるから」

「外食してるのか?」

「うーん・・・たまに。ほとんど自分で。・・・あんまり好き
じゃないけど」

「ふーん。・・・実はな、俺は今日から此処に住もうと思つて
るんだ」

「・・・出てつたほうがいい?」

「それだと、俺の後味が悪い。だから」

「だから？」

「俺と取引しよう」

* * * * *

・仕事分け

備依：食事の準備、戸締り

飛淵：洗濯全般

共同：掃除、食後の後片付け、買い出し

問題が発生したら、その時考える。臨機応変で。

・寝る場所

懶依（ひえい）：ベット
：ソファー（飛淵（ひえん）が寝転んでも余裕の大きさだったから問題無

三

飛淵^{ひえん}が親から受けつとつているお金を家賃として饑依^なに渡す（親の了解を得てから）。

そのかわり、食費も生活費も一切払わなくて良しとする。
お小遣いは1月1000円^{えん}。

「これでいいか？」

「うん・・・ぼく、洗濯は得意」

「よし。まかせたぞ」

「うん」

にこにこ笑う飛淵^{ひえん}の癖つ毛を搔き撫でる。

（初めて見た時から思つてたけど、こいつかなり癒し系だな）

「これからよろしく、飛淵^{ひえん}」

「うん・・・・・・・よろしくね、先生」

「よーしー何食べたい？記念に好きなモノ作つてやるよ」

「一ぼく、シチューがいい」

「わかつた。ちょっと待つてみよ」

確かシチューのルーは買つてあつたよな。
さつそく人参^{にんじん}の皮むきから取りかかるつ。

教師生活初日。小さな同居人が出来た。

05・傭兵先生と小さな同居人（後書き）

飛「・・・おいしい」

儻「そーだらうそーだらう」

飛「先生、料理、上手なんだね」

儻「まあな。ガキの頃から炊事洗濯は自分でやつてたから」

飛「す」「ねえ」

儻「お前・・・なんかホント癒されるなあ。今までに出合った」と
ないタイプだ

わしやわしや

飛「・・・先生、髪・・・『まわぼさ』なる」

儻「けつこう柔らかい髪してるよな」

飛「・・・」

どいつも飛淵は儻依の父性本能（～）をぐずぐるよいつです。
話の中に出でてきた圓^{えん}は、そのまま円と同じだと思つて下れ。

飯を食べ終わつた後、家に飛んで帰つて精靈語で書かれた本と、インクを取りに行つた。

ようがくから我が家までは徒歩で片道3時間かかる。さすがにそんな時間がかかると困るから、文字通り飛んで行つた。
夜の風をきる感覚は気持ちが良い。大きく息を吸つて吐くと、身体の中から浄化されていつているような気がする。

暑い夏を過ぎ、秋に片足を突っ込んだ今の時期は、夜になるのが早い。

ようがくを出た時はまだ明るかったのに、戻ると5歩先も見えないような暗闇に包まれている。結局、徒歩で行つた時とたいして変わらない時間に仮眠室に着いた。

家に入つたとたん、玲愛に捕まり、由良にお茶を出されて、なかなか出られなかつたのだ。

部屋に戻ると、飛淵は、ソファーの上で丸くなつていた。

ずり落ちやつになつてこる毛布を掛け直してやりながら、妙な感覚に襲われる。

（なんか、小さこ子びもを深夜まで置き去りにしてしまったような罪悪感が・・・）

今まで、じつして一人で暮らしてきたんだから、飛淵は何とも思つていなかつた。だけど、こんな小さい子ども（炳汰よりは確實に小さい）が一人暮らしつのは・・・・なんだかなあ。

「はあ～、あーあ・・・」

ソファーの傍にしゃがみこんで、飛淵の髪を撫でる。つむ。良い手触りだ。

（ま、考えたつて仕方ないし。俺もとつととシャワールームに向かつた。

最後にもう一度飛淵の髪を撫でると、シャワールームに向かつた。

「よしーちゃんか

「おーい！」

教師生活2日目。

今は3限目の実技授業だ。

昨日した約束通り、文字を使った精霊魔術の手本を見せるために校庭に出ていた。

ちなみに、朱雲は端の方で火の玉をいくつも浮かべていて、その左では、匡凜が地面に座つて何かを書き殴つている。さらに距離をおいた左側には、和巳が刀を手に座禅を組み、精神統一を行つていた。

(へえ・・・刀か。珍しいな)

レイピアのような両刃剣が主流のこの時代に、刀なんてそういう見る機会はない。

(あれ? そういうば、刀を中心とした流派があったような・・・)

「センセー……」

「・・ん？」

「なあに、ぼーっとしてんだよーー早く見せてー！」

「わかったわかった。田えかっぽじって良く見てろよ

「か、かつぽ・・じつて？」

「そこは気にしなくて良い。ちゃんと見てろよ

「おひー！」

田をキラキラ輝かしている炯汰けいたにちよつと苦笑して、ズボンのポケットから ありがとう。感謝します と書かれた紙を取り出す。

あ。ちなみに今日の服は礼服じゃない。かといって、傭兵服でもないが。

今来ているのは、麻の少しくすんだ白い長袖のシャツに袖のない革の上着を羽織り、黒い長ズボンを穿はいている。一般的な普段着だ。

今日の朝、学園長によくよく聞いてみると、礼服よりも私服で授業を行っている教師の方が多いらしい。真面目な学園長は、たとえまともな服を着ていたとしても不満らしいが、渋々目を瞑つているようだ。ちなみに傭兵服は許容範囲外だとわ。残念。

「これが昨日言つてた、魔力を注いだインクで書かいた精靈語な。ちなみに何で書いてあるでしょう？」

「ありがとう！感謝します！」

「よひしい・・・が、あんまり大声で叫ぶな。妙な注目浴びるだろうが」

翼を広げて青空をスイスイ飛んでいた飛淵ひえんが、心配したように俺達の頭上をぐるぐると旋回し始めたのだ。朱雲しゆなと匡凜けいりんが一いつひらを盗み見ているのも感じる。和巳はビクともしていながら。

「はい」

「本当にわかつてんのか?」

「大丈夫だつて!」

「よし。次、無駄な大声上げたら拳骨一回な

「ええ!? なにそれ!!!」

「続きなー。最後以外は同じだから飛ばすぞ

「無視つ!?

「「頼んだ」」

くすくす

たのんだですつて

ふふふ

まかせて

なんだつてかなえてあげる

なんでもいって

くすくすくす

「今、センセーなんて・・・・・?」

「赤の使者よ 集いて 天を焦がせ」

言い終わると同時に、俺と炯汰の前に俺の身長の2倍程の火柱けいたが燃え上がった。

「わ！」

驚いて一步引いた炯汰に呆れる。
(こいつも火の精靈魔術を使う癖に、これぐらいでビビッてビビっするんだ、まったく)

一瞬のうちに聳え立つた火柱は、数十秒間燃え続けると、瞬く間に消えていった。

「で、ここで紙を投げる」

なにも無くなつた空間に向けて、ありがとう。感謝します と書かれた紙を放る。

ヒラヒラと揺れながら浮かんだ紙は、何事もなく地面に落ちた。

「え？ そんだけ？ 何もなつてないじゃん！」

「どんな派手なの期待してたのか知らないが、これで終わりだ」「え？」

「そんなんに不満なら、紙を拾つて見てみろ」「紙？」

地面に落ちている紙を不審そうに眺めた炯汰は、そろそろと手を伸ばした。ちよんちよん紙を突いているが、当然なんの反応もない。意を決したように素早く紙を拾い上げる様子に、何を大げさなと思ったのは内緒だ。

紙を裏表と交互に見た炯汰の目が、大きく見開かれた。

「・・・つ文字が消えてる！..」

その言葉の通り、白い紙にはインクのシルツ残つていなかつた。

「精靈が言葉を受け取つた証拠だ。おもしろいだろ？？」

「うん。・・・うん！これ、俺も出来るんだよね！？」

「ああ。インクに魔力込められるようになつたら簡単だ」

「教えて！」

その後、そのまま特別なインクの作り方に全ての時間を使つてしまつていた。

まだ2日しか経つていないが、炯汰けいたの傾向は大方理解できた。好きな事にはとこどん集中できるが、他が駄目駄目なタイプだ。

俺的には一つの事を突き詰めていくのは良い事だと思うが、社会では不利だろうな。しかも炯汰けいたは清良族だし。色々これから苦労することになるだろう。

真剣な顔でインク壺を見つめている炯汰けいたを見る。

(ま、此処で会つたのも何かの縁だろ。何か問題が起きたら手え貸してやるか)

なんてことを思つたのは、たぶん、初めて懐いた生徒だから情に流されたんだろう。

とこう事にしておこう。

06・傭兵先生のやせやかな決意（後書き）

儺「なかなか覚えが早いな」

炯「ほんとー? やつた!」

儺「あ、おい。気い抜くと・・・・」

炯「え?」

バアアアアアアンン!

炯「ぎやあああああ！爆発したあーーー！」

儺「魔力を注ぎ込み過ぎると弾け飛ぶから気をつけろよ」

炯「言うの遅い！ つて、センセーなんでそんな遠くにいんのー?？」

儺「俺がそんな間抜けな事に巻き込まれると思つてるのか?」

炯「ううう・・・・・!」

と「「」は違ひ言語です

タイトルを「傭兵先生」に統一しました(11・3・20)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4566n/>

傭兵先生

2011年10月6日00時53分発行